

閉じた共同的世界の中で特定の誰かとして周囲の人び  
とと付き合う私たちは、たとえば家族になつた縁により  
互いに生活のリアリティや感情を込めて心を通わせてい  
るが、そこに一般化された情報を交換する「コミュニケ  
ーション」をとろうという意識を持ち込むと、それが、  
私たちを余所行きでタテマエ的な言葉のやり取りに終始  
させ、自然で気楽な心の交流やそこにこそある歓びから  
遠ざけ、ひいては家族関係を損なってしまうことになる  
と筆者は言っている。  
「コミュニケーション」が意図され、狙いを持ってと  
られるとき、様々な病理が生じる。その病的なもの蔓  
延を背景として現在の人と人の繋がり希薄さや逆に親  
密さ故の事件などが起こる。「コミュニケーション」と  
はまさに諸刃の剣なのであり、公的なものであれ、私的  
なものであれ、丁寧に扱うべき心の交流である。  
家族は本音を言える存在である。その本音が度を越し  
た「躰」となり折檻で命を奪う親がいる。筆者の言う公  
的なコミュニケーションであつても、プライベートな心  
の交流であつても、そこに他者を思い遣る節度がないと  
それは単なる自己欲求の押し付けになる。「躰」とは子

どもの存在そのものを尊ぶところから発するものであるべきで、子どもの個性を抜きにしてはできない。腕白に  
は腕白なりの生意気には生意気なりの個性がある。『窓  
際のトットちゃん』に描かれている園長先生のように落  
ちこぼれ（と思われてい）たトットちゃんに「あなたは  
本当は良い子なんだよ」と言える教育者こそ双方向性の  
ある心の交流、コミュニケーションを尊ぶ大人である。  
公的なコミュニケーションにもそのことは言える。まず  
情報を発信する側には、何のためにその情報を発信する  
のか、それは正確で公正なものなのかという情報の質の  
高さが問われる。発信された情報を受け止める側には、  
その情報がより良い目的のために発信されたものか、正  
しい情報なのかを見抜く目、情報リテラシーを持つこと  
が問われ、それを受け止めた上でこちらからの発信力  
が求められる。